大阪商業大学ＦＤ委員会

大阪商業大学 FDニューズレター

第１２号・第１３号
合併号
２０１４年３月発行

目　次

１．第５回　FD 研修会　1
「～大商大におけるアクティブ・ラーニングの試み～」
2013 年 10 月 16 日　本館 6 階大会議室

２－１．FD 委員会公開授業並びに意見交換会について
FD 委員会副委員長・公開授業検討ワーキングリーダー
総合経営学部　商学科　教授　孫飛舟　3

２－２．公開授業を終えて　5
総合経営学部　商学科　教授　松尾俊彦
総合経営学部　公共経営学科　教授　松村政樹
経済学部　経済学科　助教　中野浩司
総合経営学部　商学科　専任講師　石黒亜維
総合経営学部　公共経営学科　准教授　宍戸邦章
経済学部　経済学科　准教授　原田禎夫
総合経営学部　商学科　准教授　北室康一

２－３．公開授業　意見交換会　（議事概要）　16

１．第５回　FD 研修会
「～大商大におけるアクティブ・ラーニングの試み～」

2013 年 10 月 16 日（水）17：00～18：10、本館 6 階大会議室にて第 5 回 FD 研修会が開催された。

今回は本学の先生方 2 名を講師として迎え、『大商大におけるアクティブ・ラーニングの試み』と題し講演をおこなっていただいた。当日は約 80 名の教職員が参加した。

はじめに

FD 委員長を務める西嶋淳教授より開催にあたっての挨拶やねらい、またアクティブ・ラーニングについては「多種多様な形態があってよい」という認識のもと、情報提供として本学において取り組んでおられる伊東眞一教授、中野浩司助教の 2 名の先生方に講演いただく運びとなった旨が説明された。

取引実験（中野浩司助教）

中野助教からは、経済実験を実際に参加している先生方のうち 20 名に体験していただくといった形式で講演が進められた。まず、実験についての具体的な説明はされないまま、1 度目の実験参加者 10 名を募った（これは後の伊東教授の講演につなげるため）。10 名揃った時点から実験について詳細な説明がなされ、実施へと移った。

実験のねらいは、参加者が配られたカードの内容をもとに取引を行い、その結果を記録してグラフにすることで実際の理論との比較を行うというものであった。実験に参加した先生方は楽しんで取引をされたようで、活気のあるやりとりが見られた。続けて同一内容で 2 度目の実験がなされた。こちらも 1 度目の実験以上に先生同士のやりとりが活発におこなわれ、市場取引の体験を楽しまれたようであった。

経済実験のようす

その後、集計したデータによるグラフをもとに中野助教より、理論に対して実際のデータはどのようになっているのかという観点から解説があった。この取り

組みは、講義中に経済実験をおこない学生に参加させることで、学生にとって経済学の理論が抽象的なものではなく、自分の体験から生きた情報を得て興味をひくものとなるのがねらいであるとの説明もなされた。またこのような学生参加型の取り組みは、授業で学生同士の出会いの場を提供することや、学生と教員の接点を生み出すことにもつながるのではないかとの考えが述べられた。

「小さな冒険」実践報告（伊東眞一教授）

伊東教授からは、実際に授業で実施した「小さな冒険」という体験プログラムについての報告がなされた。実験は中野助教の講演の際に、実験内容を知らせずに参加者を募るといった形式ですでにおこなわれており、まずそのときに感じたことを記述するよう参加者に求められた。授業でも、学生に同様の状況を体験させてそのときに感じたことを記述させたそうだ。この取り組みには「リスクを伴う行動が求められるときに起こる葛藤に気づく」等のねらいがあるとの説明がなされた。実際に授業で学生から提出された感想が紹介され、ねらい通りに理解されていることが分かった。同時にプログラムの問題点も説明され、一切情報を与えないことの難しさ（教員は学生と目を合わせてはいけない、など）や人数が揃わない場合の対処を考えなければならないなど、実践には工夫が必要であると報告はまとめられた。

伊東教授による報告

おわりに

伊東教授と中野助教より講演があった後、片山隆男副学長より総括がなされた。

片山副学長からは、アクティブ・ラーニングのような授業への工夫をどのように高めるのか、また対象となる学生が「1 人での行動を好む」といったように変化しているが、それにどのように対応していくのかといったことを心がけるべきであるとの指摘があった。続けて教員同士でともに工夫を重ね、意見を交換して互いに参考にしていきたいと今後の展望を示され、本年度の FD 研修会は閉会となった。

２－１．FD 委員会公開授業並びに意見交換会について

FD 委員会副委員長・公開授業検討ワーキングリーダー
総合経営学部　商学科　教授　孫飛舟

昨年の 10 月 28 日（月）～11 月 1 日（金）、FD 委員会活動の一環として公開授業を実施した。これは毎年実施されているもので、今年度は下表の通り、各授業を担当されている先生方の協力を得て、無事に実施することができた。紙面を借りて協力してくださった先生方にお礼を申し上げる。

月　日	時限	科　目　名	担当教員名
10 月 28 日(月)	2 限	物流戦略論	松尾　俊彦
	3 限	ｱﾐｭｰｽﾞﾒﾝﾄ産業史	松村　政樹
10 月 29 日(火)	2 限	ﾐｸﾛ経済学入門	中野　浩司
	3 限	基礎中国語	石黒　亜維
10 月 31 日(木)	3 限	国際ﾏｰｹﾃｨﾝｸﾞ論	孫　　飛舟
	4 限	社会福祉入門	宍戸　邦章
11 月 1 日(金)	2 限	公共経済学	原田　禎夫
	4 限	情報ﾘﾃﾗｼｰ	北室　康一

実施に当たって、各授業の選定基準は一体どのようなものなのか。まず、慣例としては、毎年新任の先生方の授業が選ばれている。今年度では、松尾先生と中野先生が該当者である。そして、FD 委員会の委員で、これまでまだ公開授業が実施されていない先生方の中から、宍戸先生と私（孫）が選ばれている。それ以外の各授業については、学科のバランス、曜日・時限で選ばれている。松村先生（公共経営学科）、石黒先生（商学科）、原田先生（経済学科）、北室先生（OBP）がそれぞれ該当者となったわけである。さらに、今年度、なるべく若手の先生方を中心に公開授業を行っていただき、ベテランの先生方に見学していただいてアドバイスを頂戴するというスタンスもあり、このようなスケジュールを

組ませていただいたのである。公開授業の実施期間中、FD 委員会以外の先生方も時間を割いて授業を見学し、また意見交換会にも出席し、貴重な意見を述べてくださり、心より感謝を申し上げる。

公開授業後の 11 月 13 日（水）に意見交換会を開いた。交換会では、授業担当の各先生による授業概要の説明、授業準備・実施の際の注意点、今後改善すべき点などを述べた後、授業を見学された先生方から気付いた点やアドバイスなどが述べられた。総じて言えば、授業担当の先生方がより良い授業を行うために多大な努力を払った点は非常に評価に値する。ある先生は、授業中にスライドと板書を併用して、文字で説明しきれない部分をスライドで実際の写真を見せながら、学生により理解しやすいように工夫している。また、ある先生は授業の途中にワークを取り入れ、学生同士で実際にシミュレーションさせることで学習の効果を確かめさせたりしている。ただ、多くの先生から、授業中の私語が気になって、特に人数の多い授業では学生をいちいち注意するにはかなり限界を感じるといった意見も出されている。

この点に関しては、公開授業を担当した先生方だけではなく、他の多くの先生方も同じ思いを持っているに違いない。この問題を解決する特効薬はなかなかないのが実情で、「最初の授業の時にきちんと授業ルールを説明し、守らない学生を厳しく注意する」という意見や、また「授業の最初に出席をとって、出席目当ての学生を早く教室から出させる」といったちょっと「過激」な意見もある。正直、私の授業にも出席目当ての学生が出席をとってからこっそり教室から抜け出したりすることがある。その場合、本学の出席システムの早退チェック機能を利用することをお薦めしたい。理由も言わずにこっそり教室から出ていった学生を見つけ出し、掲示板で呼び出しを行う。少し手間がかかるが、かなり効果がある。呼び出して授業ルールの順守を約束させる。次回また授業ルールを守らないような行為を発見した場合、ペナルティを課す。最悪の場合、授業履修を認めない。先生方の手間が増えるが、また場合によって教務課、学生生活課の協力を仰がなければならない事態も発生するかもしれない。とにかく授業を担当された上で何か困ったことがあれば、1 人で抱え込まずに、FD 委員会も一つの窓口として気軽に相談してください。

２－２．公開授業を終えて

総合経営学部　商学科　教授　松尾俊彦

FD 委員会の依頼を受け、2013 年 10 月 28 日(月)の２限目に「物流戦略論」という科目を公開授業として実施した。４月から本学でお世話頂くことになり、その意味では他の先生に授業をチェックして頂くことは､私自身にも大いに興味あるものとなった。これまで 31 年間教員生活を送ってきたが、受講してきた学生は毎年 40～50 名で、ほとんど学生の氏名と顔は一致した形で授業を行ってきた。しかし、本学では 150 名程度の学生を対象とし、かつ、前期は 530 名教室であったため、戸惑う面が多かった。特に、私語などを注意する際に、その学生を名前で呼べない点が戸惑った。それはそれでやむを得ないこととは思うが、いち早く環境に慣れ、そこで効果的な指導方法を身につける必要があろう。ただし、後期に教室変更の依頼を受け、少し小さな教室となったため、授業はとてもやり易くなった。

私が続けてきた授業スタイルは、まず、板書することである。本来ならば、重要なキーワードや図などを板書して、その内容を説明すれば、受講生はそれを聞いて自分の授業ノートを作るべきと思うが、これまでの経験では、それはほとんど無理ではないかと感じている。特に最近は､「メモ」すら取れない、取らない学生が多い。したがって、できる限り板書することに努めているが、学生が書き写す時間が必要となる。これを無視すれば、学生は単に板書を写すだけで終わってしまうことになるので、板書は出来るだけ短いものとし、学生に向かって説明と質問を繰り返すことに注意している。そのために、必要に応じてパワーポイントを使って図を見せたり、写真を見せたり、あるいは動画を見せたりするように心がけ､「ノートにメモを取ったか？」と確認することを心がけている。

さて、教員は自分の授業スタイルを批判されることを好まない場合が多い。前職でも、公開授業は行われていたが、授業を見る先生は絶対に批判しないことを前提とし、授業を見に行った先生は､自分にとって参考となった点だけを報告することをルールとしていた。しかし、本来であれば初等教育や中等教育で行われているような、指導を含む FD 活動が大学でも実施できれば良いと思うが、自分が当事者となればやりにくいだろうと思う。本

学でも、公開授業の後で FD 委員会が開催され、反省点などをお聞きすることが出来たが、委員の皆さんの真摯な態度に安心するとともに、これならば本学の FD 活動は継続できるものと確信した。何よりも学生の立場に立った意見が多く聞かれ、面倒見の良い大学の一面を見せて頂いた。

最後になるが、この一年は周りがよく分からないまま授業を行ってきた面を反省している。来年度は、本学にとって相応しい授業内容となるよう、一部やり方を変えようかと考えている。試行錯誤は続くとは思うが、これからも機会があれば公開授業をお受けして、ご指摘を頂ければとお願い申し上げます。

総合経営学部　公共経営学科　教授　松村政樹

今年の公開授業では、私の担当する「アミューズメント産業史」を参観していただくことになりました。お忙しい中、聴講していただいた先生方にお礼申し上げます。さて、講義の進め方について教育の方針といった大げさなものはお出しできませんが、私なりに心がけていることをまとめてみます。

まず、私の担当している「アミューズメント産業史」の講義内容について紹介します。アミューズメント産業の中でも、テレビゲームやオンラインゲーム、さらには SNS の歴史や業界に見られる競争戦略について解説する、というのが私の設定した講義内容です。テレビゲームなどを趣味にしている学生にとって、あるいは昔テレビゲームをやったことのある学生にとっても興味を引きやすい講義ではないかと思われます。講義の進め方としては、以下の三点を心がけるようにしています。

① 学生の興味を引くために、著名なテレビゲームソフトや、最近のゲーム業界の話題を取り入れること。

② ゲームという、学生に親しみやすいジャンルではあるものの、講義の中では経営

学における理論をできる限り登場させることで、業界の歴史・現状紹介に終わらないようにすること。

③　毎回の講義開始時には、必ず「前回の講義のまとめ」を話すこと。

①　については、ゲームにある程度親しみがある学生が受講しているという前提で、例えば「ファミリーコンピュータ」はおそらく皆さんの親御さんが遊んだもの、といった話題から講義を始めます。講義の内容が、学生の生活と無関係ではない、ということを意識してもらいたいからです。学生がなかなか新聞を読まないことも承知していますので、ゲーム関連の記事を見つけると、その都度配布して理解を促すようにもしています。

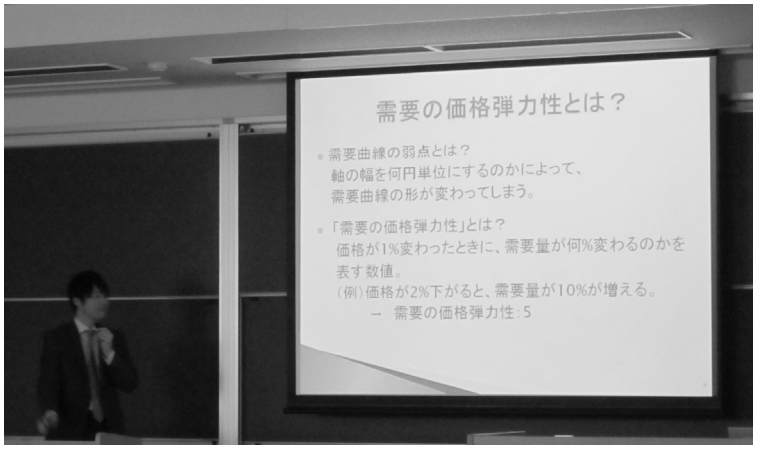
②　について言えば、テレビゲームの歴史のなかでは、経営戦略、マーケティングの事例研究に使えそうな話題がたくさんあります。テレビゲーム機の価格の話をした時にはマーケティングのプライシング、ゲームユーザー同士のつながりの話をした時にはネットワーク外部性、などの学説を紹介し、ゲーム業界でみられる現象の背後にはどういった理論が隠れているのかという説明をするようにします。教科書に書かれた学説が、学生たちの知るゲーム業界と密接につながっていることを意識してもらうためです。

③　については、一週間前の講義内容を理解していない、あるいは前回の講義で休んでしまった学生に対し、スムーズに講義を聞いてもらえるようにという工夫です。「これまではこういう話題になっていましたね。だから今週は続きのここから話しますね」というようにします。

学生アンケートの結果は、概ね好評のようでした。ただし、昨今提唱されている双方向の講義にはまだ取り組めていません。今後の課題とさせていただきたいと思います。

経済学部　経済学科　助教　中野浩司

2013 年度の公開授業において、私の担当する「ミクロ経済学入門」が選ばれ、諸先生方からご助言を頂く機会を設けて頂いた。本授業はモノの値段やサービスの料金がどのよう



に決まるのかなど、ミクロ経済学の初歩について学ぶ授業である。ミクロ経済学で扱う内容は学生の日常生活と密接な関わり合いがあるにも関わらず、数式やグラフを用いて抽象的に説明することが、ミクロ経済学を初めて学ぶ学生の理解を妨げると言われている。そこで本授業では数式をなるべく用いずに、具体的な例から説明することを心がけており、公開授業ではドーナツやクッキーなど想像することが容易な商品を説明に用いて学生の理解が進むことを目指した。また、本授業では教員が一方的に説明するだけではなく、学生が主体的に取り組むことを目標としている。公開授業では各学生にドーナツやクッキーなどにお金をいくら使うかなどを質問し、その答えから需要曲線や需要の価格弾力性といった専門的な言葉を説明し、ミクロ経済学に対する理解が十分に深まることを目指した授業を展開した。

公開授業後に授業を拝見してくださった先生方からご意見をいただき、学生とのコミュニケーションがとれている、学生が静かに授業を受けている、そしてパワーポイントを用いた説明と学生が取り組むワークのバランスが良いことを評価して頂いた。その一方で、学生が静かすぎるため、学生が積極的に動く機会を設けることをご提案頂いた。このご提案を踏まえ、公開授業後の授業において学生が席に座ったままではなく、体を動かしながら学ぶ「取引実験」を実施した。この実験では 10 人の学生が買い手と売り手に分かれ、いくらで商品を売りたいか、または買いたいかを周りに伝えながら、市場の仕組みについて学んでいくものであり、学生が生き生きと授業に取り組むことを確認することができた。 公開授業を終えて、さまざまな先生方に授業を拝見して頂くことは、授業の在りかたを改めて考える貴重な経験となることがわかった。また、ご助言頂いたことは今後の教育活動にお

いて貴重な財産になると考えている。最後に、このような機会を設けて頂いた FD 委員会委員長の西嶋淳教授、公開授業ワーキング担当の孫飛舟教授、そして公開授業を実施するうえでご支援頂いた職員の皆様に心から感謝申し上げる。

総合経営学部　商学科　専任講師　石黒亜維

10 月 29 日（火）3 限、はじめての公開授業（「基礎中国語」PA・PB クラス）に臨んだ。語学の授業で平生から教室を歩き回りながら授業を行っているため学生との距離も近く、「先生、なんだかいつもと違いますね」と冷やかしの言葉を受けながらも、いつも通りの授業を行った。以下、日頃考えていることを整理して述べてみたい。

今回公開授業の科目となった「基礎中国語」においていつも念頭においているのは、いかにして受講する学生が「楽しい」と思える（≒知的好奇心が多少なりとも満たされる）授業にするかということである。では、具体的にどうしたら学生が「楽しい」と思えるか。さまざまな考え方・とらえ方があろうが、①「新しく何かを知る喜びを感じ取れること」（新発見）、②「何となく知っていたことを別の視点で確認出来ること」（再発見）、③「知っているつもりが覆されること」（意外性・驚き）の 3 点を学生が感じ取れるかどうかにあるように思う。

幸いなことに「基礎中国語」は、日本人が慣れ親しんでいる漢字を用いる言語であるため、上述の①②③のいずれも学生に伝えやすい側面をもっている。例えば、公開授業の際に扱った「你喝咖啡，还是喝红茶？」という文を例に挙げれば、「喝」＝「飲む」、「还是」＝「or」であると理解するのが①、「咖啡」、「红茶」がそれぞれ「カー・フェイ」、「ホン・チャー」という発音になることを知るのが②（あるいは③）という具合である。

「基礎中国語」＝「語学」の授業でもう一点、「楽しい」ものにするためにいつも心がけているのは、単なる「ことば」の授業で終わらせるのではなく、ことばの背景となる「文化」や現代中国事情にも時間の許す限り触れるということである。というのも、外国語を

学ぶ際には、否応なしにその「国」を意識せざるをえず、そのイメージが言葉に対する興味・関心に大きく影響を与えるからである。これまた幸いというべきか、「中国」に関しては、決してネガティブなものばかりではなく、日常に浸透した中華料理をはじめ『三国志』などの歴史物語、映画やスポーツ等々、学生の興味を引く話題には事欠かず、それらいずれもが上述の①②③を満たす要素を多く含んでいる。

このように授業では毎回テキストに沿って会話文の発音練習や文法事項の解説を中心に話を進めることと合わせて、その時々のトピックスに関連する映像資料を適宜活用し、学生の興味、関心が持続するよう努めている。今回の公開授業では、授業の後半、語学学習の延長として日本人歌手によるヒットソング（『長い間』）の中国語カバーバージョン（『很愛很愛你』）を取り上げ、日中双方の関連する映像をながし中国語歌詞の発音練習をするなど、少しでも学生が語学学習の「楽しさ」を感じ取れるよう授業を展開させた。

以上、当該科目に対する取り組み（理想）について述べてきたが、次に問題点（現実）について 3 点述べたい。第一に、いかにして落伍者を防ぐかという問題である。外国語基礎科目（必修）である「基礎中国語」は毎年各学科クラス毎に時間割が固定されており、例年履修者は 50 人前後、そして通年科目（計 30 回）の長丁場である。しかし、前期の早い段階で無気力・無関心がみてとれる学生が現れはじめ、学習能力の差もしだいに顕著となり、欠席者も目立つようになる。実際公開授業の日は、履修者 50 名のうち欠席者が 14 名あり（学年末試験は欠席者 10 名）、この傾向は毎年変わらない。言い換えれば、これは授業内容に対する学生の興味・関心をいかに持続させるかという問題かもしれないが、担当者の努力、工夫だけではどうにもならない無力感をしばしば感じさせられる。

第二に、上述の問題とも関連するが、学生の学習能力差をどう縮小させるかという問題である。語学科目であるがゆえに発音練習を重視し、適度な緊張感を持たせるためにも毎回必ず学生一人一人に発音をさせ、そしてまた日本語に訳させることを通して理解度チェックするが、後期の段階ではしばしば学習意欲の低い学生に時間をとられ、レベル（学習意欲）の高い学生が暇をもてあますこととなる。受講者数が多い故のなかなか克服しがたい問題である。

第三に、授業態度や私語に関する問題であるが、何かと問題視される携帯電話については、携帯出席システム利用後は鞄にいれてしまわせることを徹底させ、私語についても厳しく注意することでコントロールすることは可能である。しかし居眠りをして授業を放棄する学生に対しては、果たしてどこまで関与すべきか。以前は黙認していたが、あまりに

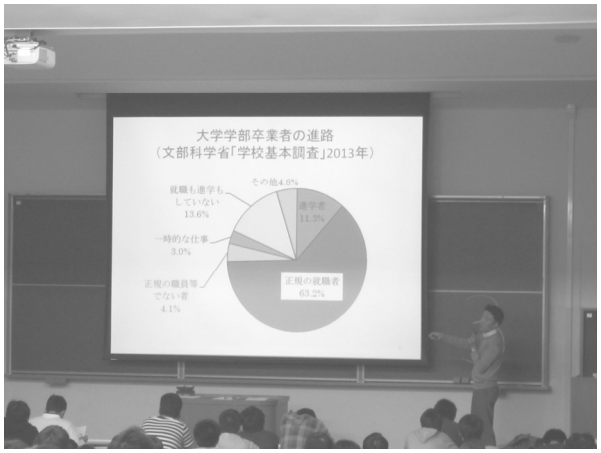
目につく場合は、教室の空気を重くするので、大変な労力を費やしながらも無理矢理に起こすようにしている。

最後に公開授業後の学生アンケートと FD 委員会による意見交換会に触れておく。意見交換会では、授業で中国語の歌を紹介するなどして学生の興味・関心を引き出そうと工夫している点を高く評価いただいた。他方、授業中の私語については、より厳しく対処した方がよいのではないかとアドバイスをいただいた。学生アンケートでも「いつもどおりでわかりやすかった」、「中国語の歌があって楽しかった」という好意的な意見が多くホッとしたものの、私語については「もっと厳しく対処してほしい」という声もあり、授業を「楽しい」ものにするため許容範囲ととらえていた私語が、一部の学生にはこちらが思う以上に大きな不満を与えることになっていたことを認識させられた。この点は真摯に反省すべきで、改善する必要を強く感じることとなった。

公開授業と意見交換会を通して、教員が教員を評価するというある種独特の緊張感を経験したが、同時にまた、授業の目的や意義、学生との向き合い方を冷静に見つめ直す良い機会を与えていただいたように思う。今後も毎回公開授業に臨むつもりで適度な緊張感をもって学生と向き合うことが、より多くの学生を楽しませ、知的刺激を与えることのできる授業に繋がるのかもしれない。

末筆ながらこの場を借りてこのような機会を設けて下さった FD 委員会と授業をご参観下さった先生方に心より感謝申し上げたい。

総合経営学部　公共経営学科　准教授　宍戸邦章



私が担当した公開授業は、後期 15 コマの社会福祉入門である。2011 年度から開講し、今年度で 3 年目である。2011 年度から受講生は 63 名→118 名→262 名と増加している。講義を開始した年度が新しいこともあり、学生の反応を見ながら講義内容を毎年度修正している。受講生の増加に伴い、講義のやり方も変えざ

るを得ない。2012 年度の授業評価アンケートの結果では、授業満足度が 4.1 であり、全体平均 3.6 よりは若干高い。以下に私が社会福祉入門で工夫している点、また悩んでいる点を簡単にまとめておきたい。

まず、学生の関心を引く工夫である。本講義は、高齢者、障がい者、また福祉に関わる法律など、学生にとって身近ではなく、興味の持ちにくい事柄が出てきやすい。講義の前半で社会問題を広く捉え、若年層の貧困や過労問題、それらのリスクに対応するためのセーフティネットの内容を絡めながら学生に福祉を身近な存在として感じてもらう努力をしている。私語を防止する工夫としては、1 回目の講義で、私語に対する罰則を口酸っぱく説明している。以前参加した FD 講習会で学んだことだが、1 回目の講義でルールを学生と共有しておくことが大事なようだ。講義開始から 1 時間を過ぎたあたりから学生の集中力が切れやすくなる印象があるので、講義中盤では 10 分程度の社会問題に関わるビデオを見てもらい、考えたりリフレッシュする機会を作っている。また、講義時間中にいくつか質問を投げかけ、挙手してもらい、回答した学生には加点するシステムを取り入れている。学生は、私の話よりも挙手した学生の回答に耳を傾けるようである。

悩んでいる点は、板書とパワーポイントのどちらがよいか、である。学生にアンケートで聴いた時には半々であった。本講義では映像や図表資料が多いので、黒板とスライドが並列可能な設備があれば望ましいように思う。また、私はどの講義でも 2,000 字程度のレポートを課しているが、受講生が多くなるとレポートの採点に多大な時間がかかる。しかし、レポートは学生の能力を高めるよい方法なので、受講生が何人になろうとも続けたい。最後に単位認定の難易度の問題である。私の講義では期末試験を受けた 3 割程度の学生は D 評価になってしまう。この割合が高いのか低いのかよくわからない。今後、学生の多様化がさらに進むが、単位認定の難易度をどの程度に設定するか、「教え方が悪いのかなぁ」と思いつつ悩み続けるだろう。

公開授業後の意見交換会では、先生方から厳しいご批判やアドバイスをいただいた。お忙しいなか、未熟な講義を聴いていただいた先生方に厚く御礼申し上げる。来年度以降の授業改善に役立てていきたい。

経済学部　経済学科　准教授　原田禎夫

今年度、私の担当する講義では初めて公開授業を実施し、さまざまなご意見やご感想をいただいた。ここでは、自身の反省も兼ねて授業を振り返りたいと思う。

公開授業を実施したのは、主として経済学部の学生が受講する「公共経済学」で、受講生は260名を超えるいわゆる大教室での講義である。授業の実施にあたって年度当初に腐心しているのは、静謐な授業環境の維持である。学生の受講態度も全体として真面目であり、また私が担当している財政学と同時に、あるいは履修後に受講している学生が多くを占めることもあって、学生とのコミュニケーションは比較的取りやすく、授業の実施にあたっては恵まれた環境にあると思われる。ただ、残念ながら一部には私語を続ける学生もあり、こうした学生には積極的に注意するように心がけている。

講義内容でもっとも苦労している点は、同時に開講している財政学や地方財政学との内容の調整である。学問分野としてはきわめて似通っており、特に基礎的な理論は共通するため、毎年苦労している部分である。公共経済学の講義では理論分野を中心に授業計画を立てているが、そこで問題となるのが基礎的な経済理論を学生が十分に習得していないという点である。特にここ数年、その傾向が強まっていると感じており、本来は基礎科目の講義で習得している内容について（財政政策の効果等）、今年は復習も兼ねて時間をかけた解説を試みた。ただ、社会的にもいわゆるアベノミクスへの関心が高まっていたこともあり、学生の関心も比較的高く、その後の理論的解説の導入がスムーズになったことは今年の収穫である。

本講義では、以前は毎回の講義後に、確認を兼ねた小テストを実施していたが、ここ数年は、受講生が急増したこともあって学期末試験のみによる成績評価としている。しかし、残念ながら学生の理解度は十分ではないと感じているところである。財政学では2年前から小テストを復活させたところ、飛躍的な成績の向上が見られただけではなく、普段の受講態度も大幅に改善した。学生から寄せられる質問や相談の中で、ここ数年の中で特に多いものは、講義の内容そのものではなく、「どうやって予習や復習をすればいいのか分から

ない」といったものである。本講義でも、確認テストの実施は学生からの要望も多く、予習・復習の習慣化をどのような方法で図るのか、今後の課題である。

なお、公開授業の実施にあたっては、諸先生方から有益なコメントを多数頂いた。ここに記して感謝したい。

総合経営学部　商学科　准教授　北室康一

今年度の公開授業では、私の担当する情報リテラシー(OBP)が取り上げられた。情報リテラシー(OBP)は、OBP 生のみを対象とした 1 年次配当の半期の必修科目であり、OBP の 1 年と 2 年の編入生が受講する。金曜の 4 講時に、OBP 生用 PC を利用できる 642 教室で開講されている。情報リテラシー(OBP)は、主に ICT に関する知識を学習する授業であり、OBP コースのカリキュラムから、IT パスポート試験に合格できるレベルを目標にしている。

この授業では、一般学生が受講する情報リテラシーとは内容が異なっているため、実習ではなく座学を中心に授業を進めている。板書にはスライド(PowerPoint)を使用しているが、スライドは受講生には配布しておらず、ノートを書かせるようにしている。

公開授業に指定された授業回では、入力装置についての授業を行った。当日は、4 人の先生方に出席いただいた。

授業終了後の意見交換会には、他の授業と重なっていたため出席できなかったが、以下のようなご意見をいただいた。

『身近な話題で非常に分かりやすかった。PowerPoint でデザインが格好良く、参考にしたいと思った。学生がまじめにノートをとっていて、非常に感心した。』

『さすが OBP の学生、みんながとても真面目。後は、提案として、授業が長いので休憩の時間を設けたり、学生にワークをさせたりして気分転換の時間を設けたらどうか。』

『やはり OBP の学生は良く頑張っている。施設の面で、6 号館の教室ではスクリーンと黒板が同時に使用できないのがネック、改善してほしい。』

他の授業に比べて私語はほとんどなく、また途中退室もないが、これは OBP 生に非常に助けられている。この授業は受講者数が 30 人前後と少なめのため、ノートをとっている最中かどうかを判断しやすい。そのため、教員側の工夫として、私語をする暇を与えないよう、しかし板書漏れのないよう説明の時間とスライドを切り替えるタイミングを調整している。また、これまでの経験から、1 枚のスライドに載せる文字のサイズ、文字数の目安を決めている。

学生のワークについては、以前、学生発表として取り組んでみた。しかし試験範囲を網羅するまでには至らず、資格試験の範囲の網羅と学生のワークとを天秤にかけた結果、座学を優先することにしたのだが、大掛かりなものであったかもしれない。これまでの反省といただいた意見から、授業時間内で終わらせられる比較的簡単なワークを取り入れることについて検討しており、2014 年度に試験運用予定の授業支援システムの利用を考えている。

教室の設備については教員ではいかんともしがたい事案であるので、ここでは割愛させていただく。

今回の公開授業および意見交換会を通じて、他の先生方から改めてご指摘いただくことで、すでに気が付いていたことでも、再確認でき、改めて授業改善を行うきっかけとなった。この場をお借りして、お忙しい中、授業に参加していただき、ご意見いただいた先生方に厚く御礼申し上げる。

２－３．公開授業　意見交換会（議事概要）

2013 年 11 月 13 日（水）に第 4 回 FD 委員会・公開授業意見交換会が開かれた。参加者は公開授業担当教員、FD 委員、公開授業参観教員の計 14 名であった。

担当教員、参観教員それぞれに授業の進め方やアンケート結果を振り返り、以下のような意見が出た。

＜担当教員による感想＞

・私語をする学生にもっと注意をしてほしいという意見があったため、心がけたい。

・板書の際は書き写すための時間を取るようにしているが、もっと話した内容を板書してほしいという学生の意見もあった。

・受講者数が多く、学生それぞれのレベルの差が大きい。

・講義に関連する画像を見せることがあるが、それを増やしてほしいという意見があった。

・パワーポイントを使用しており、学生からは進行が早いという指摘もあったが、スライドを丸写しでは間に合わないことは伝えている。

・学生が理解しやすいように、図を使って説明することを心がけている。

＜参観した教員による感想＞

・板書のスピードが話すスピードに対してバランス良くなされていた。

・学生の私語が気になった。

・講義で話した内容すべてを板書する必要はないと思う。学生も自分でメモを取ることを覚えるべき。

・学生に課題をさせる際、それぞれの進捗状況を確認しながら進めていて、参考にしたいと感じた。

・学生同士の間で、講義に対する熱意に差があるように見えた。

・私語をしている学生に対して名前を呼んで注意していたので効果的だったと思う。

・質問に対して挙手をした学生へ加点しているのは、他の学生にも良い影響を与えているはず。

・パワーポイントを使用していると前方の席は暗くなってしまい、ノートを取りづらいのではないか。

・卒業生のことを話題にしていたが、学生の関心をひくので良いと思う。

・メモなどを見ずに講義されていて感心した。

・身近なものを取り上げて説明していたので分かりやすかった。

その他、出席確認をおこなうタイミングや大教室での受講態度への注意などが講義を進めるうえでの悩みとしてあげられた。それぞれの考えや工夫についても議論され、公開授業検討ワーキングリーダーである孫飛舟教授より「今回の意見交換会のように横の連携を大切にし、議論・相談をしながら互いに検討していきたい」との総括がなされた。

今回の意見交換会では、授業担当教員・参観教員ともに多くの感想や意見を述べられ、その授業を見学しなかった教員にとっても有意義なものだったのではないだろうか。また、終了後も意見交換をされている様子が見受けられ、参加された教員には非常に多くを得られるものだったと思う。今後もこのような意見交換の場が積極的に設けられることを期待したい。

大阪商業大学　ＦＤニューズレター　第１２号・第１３号　合併号

発行日：２０１４年 ３月 １５日

発　行：大阪商業大学ＦＤ委員会

〒577-8505　東大阪市御厨栄町 4-1-10

Tel 06-6781-8816　　Fax 06-6781-8438